



## 巻頭文

## 図書館も決断しました

図書館長 笠井 聖二

図書だよりの巻頭言を書くのは何回目でしょうか。その中で電子書籍やデジタル図書館の話は何度も書いてきました。図書館として新しい流れを感じ、それに対応していきたいという気持ちから、書いてきたのだと思います。前回の巻頭言は「本棚を持ち歩く」ということで、電子書籍の話をしました。何度も口に出していると、実現するものです。遂に、図書館として「図書館に電子書籍を導入する」ことになりました。

図書館で電子書籍を購入する場合の一番の気かりは、「価格」です。皆さんは、「電子書籍なのになぜ？」と思うかもしれません。Kindleなどの個人利用の電子書籍では、普通の本より電子書籍の価格が安くなるのが一般的ですが、図書館で購入する電子書籍では高くなります。紙の書籍の2倍程度というのも普通です。それで、これまで購入を躊躇してきましたが、電子書籍の特徴を活かせる本なら購入する意味があると考え、購入を決断しました。電子書籍ならではのことで、「一般に禁帯出になる図書や持ち運びしにくい大型本はどうか。逆に借りるほどではないが気軽に読みたい本もよいのではないか。学びの場を広げるということで、勉強中にちょっと使いたい参考書や資格・検定本なら利用が多いのではないかなどと考えています。その中で、「旅行ガイドブック」も挙がってきました。「旅行ガイドブック」は図書館でも利用が多いのですが、情報が古くなると役立たないので買い替えのタイミングも難しい本のひとつです。そこで期限付きの電子書籍だと、購入・更新もやりやすいのではないかと考えています。更に、旅先で急に必要になったときに、電子書籍なら直ぐに借り出してその場で利用することも可能です。このように、電子書籍により、新たな価値やサービスを生み出すことを考えながら、今、本を選んでいくところです。本のジャンルが決まっても、総ての本が電子書籍になっているわけではないので、本を選ぶのもなかなか大変です。書籍リストから内容を予想し、webで検索して趣旨に合った本かどうかを1冊ずつ確認しています。初めての電子書籍の購入なのでそれほど多くの本ではありませんが、新年度から図書館に電子書籍がお目見えします。楽しみにしておいてください。そして、私たちも、皆さんが電子書籍ならではの新しい使い方を見つけ出してくれるのではないかと、楽しみにしています。

## 平成28年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

平成28年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、校長室でおこないました。最優秀は、以下の通りです。

1年 建築学科	宮崎 梨花
2年 環境都市工学科	荒谷 純怜
2年 建築学科	田中 歩希
3年 機械工学科	本多 陽敬

読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で第13回になります。学生は、

- 1年生：芥川賞・直木賞受賞作等の課題図書
- 2年生：教員の指定した課題図書
- 3年生：ノンフィクション作品や評論など現代社会に関する本
- 4年生以上：自由

と、指定された本を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。選考は、本校教員が行います。

今回は、自由応募である4年生以上の部にも応募があり、見事優秀賞を受賞しました。次回もたくさんの応募があることを期待します。



## 第13回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

## 砂の女

安部 公房 著

建築学科一年 宮崎 梨花

「砂の女」を読んで —— 逃避の先の罰と自由 ——

そのタイトルを見て思い浮かべたものは、人に砂を振り掛ける妖怪「砂かけ婆」であった。それを友人に話すと、小説のあらすじを簡単に説明してくれたことがきっかけとなり、興味を持った私は『砂の女』を読んでみることにした。

物語は、一人の男が行方不明になったところから始まる。教師の男は、新種の昆虫を採集するためにある部落の砂丘を訪れる。その村に滞在するため、村民に一軒の民家を紹介されたのだが、そこは蟻地獄のような砂の穴の底にあり、男は閉じ込められてしまう。家に住んでいた一人の女と奇妙な生活を共にしながら、男は試行錯誤して脱出を試みるのだが、いつでも逃げることでできる状況になったとき、「逃げる手立ては、またその翌日にでも考えればいいことである」と男が思ったところで物語が終わる。

読んでいるとき、私は不思議に思った。男は昆虫採集という目的を持っていたが、砂丘に来た理由はそれだけではなく、日常の反復を打破するためでもあった。時間と共に変化し流れてゆく生徒と、その流れに取り残される教師。その教師である自分の世界は灰色であり、「静止」していると男は考えていた。そして、「流動」する砂に魅かれ、砂丘を訪れた

のだ。「流動」する砂は自由である。男は自由を求めていた。しかし砂の穴に閉じ込められたとき、必死に元居た「静止」している日常へ逃げようとした。男は日常から逃げて来たというのに、なぜ戻ろうとするのか、それが不思議であった。この作品には、「罰」がなければ、逃げる楽しみもない」という題辞がある。「罰」が「男をしばるもの」であるとすれば、男はしばるものから逃げようとしていたのだと考えることができる。逆に、男をしばるものが無ければ、逃げることはないのだ。物語の最後、男は逃げることをやめる。しかしそれは彼をしばるものが無くなったわけではない。穴の中にいれば、砂掻きという労働を強いられる。そうしなければ砂に埋まってしまう上に、水の配給を止められてしまう。男が逃げることをやめたのは、「溜水装置」という一つの自由を手に入れたからだ。溜水装置を作ったことで、水の配給を止められて困る心配が無くなり、男をしばるもの一つが無くなったのである。

人は自由を求める。それはその人を「しばるもの」があるからだ。しかしある人にとってはそれが「しばるもの」ではないかもしれない。では「自由」とは何なのか。余白を自由とするのなら、自由を手にしたとき、人は何を思うのだろうか。そんなことを考えさせられる作品であった。私たちが社会で生きていく中で、逃げたくなくなるときもあるだろう。その時必要なのは、非現実的な世界ではなく自由な心だと、私は考える。ヒーローのように空を飛びたいと夢見る少年のような柔軟な心と強い意志があれば、自由を求めて逃げることもないだろう。

ところで、逃げた先にあるのは、果たして自由なのだろうか。

## きよよし

重松 清 著

環境都市工学科二年 荒谷 純怜

「きよよし」を読んで —— 自分の口で伝えることの大切さ ——

この本を読んで、一番感じたのは吃音は自分が思っていた何倍も辛いものだということだ。私が小学生の時、話す時でもってしまふ友達がいた。私はその友達が言えるまで待つのが一番良い対応だと思っていたため、止まっても聞き続けた。でも止まってしまうと頑張れ、と思ってしまうため表情に出ていただろう。この本の主人公もサ行とタ行がどもってしまう。小学生の頃は笑われていたが、中学生になるとみんな申し訳なさそうな顔をしたという。その事について辛かったとはかいていなかったが、きつと逆に申し訳なくなりもつと気にしたと思う。私は小学生の時の友達を思い出した。私のその表情をみてどう思っただろうか。どんな対応が一番良かったか考えた。だが分からなかった。でも分からないままでもいいのではないかとも思った。相手の事をちゃんと考えたのなら。なぜそう思ったかという作者は最後にそれがほんとうに伝えたいことだったら…：伝えるよきつと「きよよし」の言葉を残した。どもりながらも諦めず伝えようとする相手、それを最後まで聞こうとする自分。相手のその一生懸命さが私に伝わったのなら、きつと相手にも自分の気持ち伝わったと思う。私は吃音に悩まされたことはいが、自分の意見を主張するのが苦手だ。しかし、吃音に悩まされながらも自分の意見を言う、間違っていることは間違っていると語り、自分がどんな立場になろうとそれに関係なく友達を守ろうとする。そんな主人公きよしがいるのなら、

こんな甘いこと言っていてはだめだと思った。人にはコンプレックスがある、私にもある。それを気にしないなんてことは出来ないが、そのせいで何も出来なくなるのは悔しい。気になるのは仕方ない。だがそれから逃げるのではなく進んでいかなければならないと思う。

そしてこの本を読み進めれば読み進めるほど重なる人物がいた。それは年を追うごとに吃音がきつくなっている私の祖父のことだ。祖父はもうどもらずに言えた方が驚くほどきつくなっている。主人公はどもるサ行とタ行の言葉を使わないよう他の言葉を繰り出しどもらないよう工夫していた。だが祖父は出来ない。祖父がどもってしまうと祖母は「何をよるんね」と話を聞こうとしない。祖父は話を続けたそうにいつも悲しい顔をする。祖父にそんな顔をして欲しくなかったので、何を言いたいか予測して聞き返すようにした。今ではすぐ聞き返し話がスラスラと続くようになった。この主人公にもそうしてくれる彼女がいた。だが誤って予測することもあり、主人公が気持ちを押し殺す場面が何回もあった。祖父はどうだろうか。私が誤った予測をしたらどもり続けて伝えようとする。でもどこかでも諦めていたら、と心配になる。良かれと思つてやっていたことも、もしかしたら祖父を閉じ込めていたら。難しい、とても難しい。でも祖父は私と話しているといつも笑顔で楽しそうだ。だから分かつて予測しない言葉を決めた。「ありがとの」「じゃあの」「頑張れの」など多分自分の口から言いたいであろうこれらの言葉は待つことにした。この本を読んで、伝えたいと思つたことはやっぱり自分の口で伝えることが一番大切なんだと改めて実感した。作中の父親も彼女もそうだ。派手にどもつても待つ。なぜならそれは主人公の意志だから。祖父のはそんなに大きなものではないかもしれない。だがきつと自分で言いたいであろう。一番良い対応は、と考えるよりも、相手の事をしっかり考えたいで行動する。これが一番良い対応になっているはずだ。これは吃音だけでなく、他の事でも、格好から考えるのでなく中身をきつちりするべきだ。そうしたらきつと格好も良くなっているのでは、と思う。

## 夜のピクニック

恩田 陸 著

建築学科一年 田中 歩希

「夜のピクニック」を読んで —— 自分に足りない物は何か ——

ただ歩く。それだけを書いた小説なのに、この本は私になんとも言い表せない感動を与えました。

『みんな、夜歩く。ただそれだけのことがどうしてこんなに特別なんだろう。』この小説の中で、特に私の中で印象に残っている一節です。私も同じように感じたことが何度もあります。例えば食事をするとき。ひとりで食べるより、誰かと食べた方が何倍も楽しく感じます。どこかに旅行に行ったとき。家族と行くだけでも十分特別に感じますが、同じ所でも、修学旅行で友だちと行ったときの方が、より強く思い出に残っています。

このお話では、そんな特別な修学旅行がない学校の、修学旅行がわりに行われる学校行事、『歩行祭』が舞台となっています。歩行祭とは年に一度、全校生徒を対象に行われ、約八〇キロメートルの道のりを二日かけて歩くという、とても過酷な行事です。

主人公の貴子はもう一人の主人公である融と腹違いの兄弟で、今までお互いを避けて生活してきました。しかし高校生活も最後。貴子は自分自身と、歩行祭中に融に話しかけられるかどうか、話しかけられたら勝ち、できなかったら負け、という賭けをします。また、彼女たちの友だちもそれぞれ、いろんな思いや覚悟を胸に抱いて、最後の歩行祭に挑みます。

私はこれを読んでいくうちにいつの間にか貴子に自分自身を重ねていることに気がつきました。貴子はマイペースで気だるい性格をしていて、めんどくさいことが嫌い。私には誰かと腹違いの兄弟などという複雑な事情などありませんが、小さい頃から、マイペースとかめんどくさがりだとか、悪く言えば自分勝手だとか気分屋だと言われてきました。私にはそんなつもりはこれっぽっちも無かったし、自分なりに人に気を遣っているつもりだったので、とてもショックだったことを覚えています。友だちを作るのは元々から苦手で、どちらかというと交友関係は浅く狭く、という感じでした。仲の良い人が少しでもいれば十分楽しかったし、必要以上に友だちを作って、いつか自分の嫌な部分を見られるのが嫌だったからです。しかし、ずっと小さな輪の中で生活していけるはずもなく、自分の学年が上がるにつれ、当然のように多くの人と関わるようになりました。また自分勝手だとか言われるのが嫌で、少し遠慮しながら、それを誰かに気づかれないようにすごす毎日、とても疲れるものでした。そんな私の考えを変えたのは、仲の良い友達の言葉でした。

『自分勝手なのは、お前の長所だろ。』

私はその日から、自分の短所が長所になるように、足りない物を探してきました。そしてこの本を読んで、それを見つけた気がしました。貴子はたしかにマイペースですが、自分勝手なわけではありません。自分でちゃんと状況を見極めて、自分が今すべきことをこなしています。私にはそんな貴子の器用さが足りないのだと思いました。

貴子には、貴子を思ってくれる皆さんの友だちがいます。そのおかげで貴子は賭けに勝ち、融と話すことができました。そして友だちのありがたみをしっかりと噛みしめます。

今の私には、貴子に負けにくいくらい素晴らしい友だちがいます。『夜のピクニック』はただ歩く、それだけの二日間を描いた小説です。しかし、友だちの大切さを再確認し、自分自身を振り返るきっかけをくれたこの本は、宝物のような一冊になりました。

## 3年生の部

## ナツコ 沖縄密貿易の女王

奥野 修司 著

機械工学科3年 本多 陽敬

第二次世界大戦終戦後の沖縄は激しい戦闘で破壊されつくした。その中でたくましくしたたかに生き抜き戦後の沖縄の復興を支えた沖縄の人々と密貿易、そして密貿易の中心的な存在であった金城夏子についてこの本は書かれている。夏子が沖縄密貿易の女王となった理由を考えた。

終戦直後、米軍の上陸作戦により沖縄は隅々まで破壊されていた。食料や服などの生活用品は軍のわずかな配給に頼るしかなかった。そこで密貿易が生まれた。沖縄の米軍基地に働きに出て、スクラップ置き場や倉庫から葉きょうや油などを盗み、台湾に運び金を持って帰る。もちろん違法行為である。しかし沖縄では密貿易が島ぐるみで行われていた。米軍の取り締まりがある時は島の巡査が事前に密貿易人たちに知らせに来た。生きていくためには仕方がないと誰もが感じていた。夏子はいち早く密貿易に参入し何が一番売れるかを見極め、巧みに物資を売りさばいていった。やがて夏子は密貿易人なら知らない者はいないほどの実力者になった。

ここで私が注目したのは島ぐるみで公然と盗みが行われていたことだ。生きるためなら仕方がないという気持ちで法律、警察を無意味なものとしている。戦後、かたくなに闇市で食料を買おうとせず配給のみで生活し餓死した判事がいたそう。食糧難の中で、配給を待っている人は餓死してしまう。法律に従っている人は生きていけないような状況では法律はその効力を持たない。夏子は警察が機能せず法律の効力がないことを知っていたから堂々と密貿易ができたのだろうと思う。現状を冷静に分析できる能力が彼女は高かった。

また情報力も夏子の武器だった。華僑の林癸や台湾の商人などから何が不足しているかの話を聞き、すぐに物資を仕入れ大量に売りさばくことで利益を伸ばした。林癸をはじめとする華僑のグループとの人脈を大切にして、台湾情勢を知り次に売れるものは何かを予測していた。得た情報を分析し、将来を見通す力を持っていたのだ。

カリスマ性も彼女にはあった。夏子の話をするときは皆、目を輝かせいきいきと当時を振り返ったそうだ。彼女は困っている人がいると借金をしてまでその人を助けた。そんな情の厚さが彼女の人望を高めたのだと思う。実際に、警察に追われていた時も夏子をかかまう人はたくさんいたそうだ。

広い情報網から得た情報を冷静に分析し、そこから何が必要になるかを見通す力。また、困っている人を放っておかない温かさ。それが沖縄密貿易の女王、金城夏子の姿であり彼女が女王となった理由なのだろう。彼女はみんなから尊敬され、慕われた女王であった。現代にもし彼女が生きていれば世界を相手に戦っていたことだろう。

夏子と沖縄の人々の生き様は私に他の人と助け合うことの大切さを教えてくれた。いくら知識や分析力があっても信用や人望が無ければ思ったことを実現できないだろう。夏子は自分が得た利益を独占せず困っている人に渡していた。その時助けた人たちが後に、夏子を助けることになった。情けは人のためならず、という言葉思い出した。

高専での学生生活も残り半分となってしまった。学校という場所は知識を吸収するだけではなく、一緒に学ぶ人から人間関係を学ぶことができる。知識や分析力だけでなく人間関係も社会人には必要になる。この本を読んだ今、私は夏子のように他の人を思いやれているかどうかを今一度考えたい。

## 優 秀 賞

1年生の部

## グスコープドリの伝記

宮沢 賢治 著

電気情報工学科一年 長橋 朋也

「グスコープドリの伝記」を読んで

——彼の死から考える自分の人生——

「グスコープドリの伝記」は、その題名の通り、主人公のブドリの一生涯を描いた物語である。幼い頃から苦しい環境下で生きてきた彼は、勉学に励んで火山局の技師になり活躍するのだが、飢饉を防ぐべく自ら犠牲になることを選ぶ。

この物語を読んで最初に思ったのは、自分には決して彼のような生き方ではない、ということだ。そして、もし自分がブドリの立場だったら、と考えたのだが、ここで思考が止まってしまった。そして、最初の自分の感想とは少し別の考えが生まれた。それは、彼のような生き方ではないか、という考えである。このまま飢饉を迎えてしまえば、ブドリとその妹のために森に行つたまま帰って来なかったブドリの父母のような人が何人も出てしまう。一人の犠牲でそれを回避できるのであればその方がまだ良い方だと自分なら思うはずだ。そしてその犠牲になる者の候補の中で自分が最適な人物だった場合、最終的に犠牲になる道を選んでしまうのではないだろうか。自分の命を尊重し、飢饉を迎えるという選択ももちろんある。しかしそれでは同じ歴史が繰り返されてしまう。いつか誰かがやらなければいけないということに変わりはない。自分がブ

ドリと同じ境遇の人の立場にあり続ける限り、いつかは、犠牲になることを選ぶのだ。自分はブドリのように生きられないと思ったのだが、自分がブドリの立場であれば、自分もブドリと同じ人生を歩んでしまうのだと、この時気付いた。ではなぜブドリのようには生きられないと思ったのか。そう考えた時、自分とブドリの違いが見えてきた。それは、行動ではなく、考え方の違いだった。ブドリはこう言った。

「私のようなものは、これからたくさんできます。私よりももっともったんでもできる人が、私よりもっと立派にもっと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから。」この言葉は自分には出ない、と思った。嫌々犠牲になるからだ。しかしブドリは、未来のことを考えて自ら犠牲になった。犠牲になる理由、犠牲になることへの思い、そういった部分が違っていたのだ。

自分としては、ブドリのように自ら犠牲になること自体が正しいとは思わない。ブドリの行いから自分が学んだのはそこではなく、自分が死ぬ瞬間どうありたいか、ということだ。ブドリは死の間際、喜びであったり、誇りであったり、そういったものを感じたのではないだろうか。自分がブドリの立場なら、自らの運命を呪いながら死んでいったはずだ。どちらが良いかと問われれば、それは明らかにブドリの死に方だと自分は答えるだろう。自己犠牲の考え方には物語を読み終えた今でも共感しないのだが、それ以外の点においてブドリの最期は理想的にも思えた。勉学に励み、自らの使命を果たして人生の幕を閉じる。自分も最期はきちんと自分が満足した状態で迎えたいものだ。そのため今できることは、いろいろなことを学ぶこと、いろいろな人と関わること、他にもたくさんある。そのことを忘れずに生きていきたいと思った。



## 妊娠カレンダー

小川 洋子 著

電気情報工学科一年 水本 直希

「妊娠カレンダー」を読んで —— 淡々のなかにあった面白さ ——

私が小川洋子という作家と出会ったのは、中学二年生のときだっただろうか。「博士の愛した数式」そのタイトルに惹かれて手にとった本。内容は最高だった。

印象としては、「静か、冷たい。しかしとても温かい」といった感じで、私の中でじんわりとその温もりと感動が染みわたっていったことを良く覚えてる。そして今回は「妊娠カレンダー」という題名。——きっと本作も私にほのぼのとした感動を与えてくれるのだろう。そんな期待を胸にページをめくった。が、その期待は——とく破られてしまった。

なんだろう、この感じは。話をすべて読み終え、一言、「冷たい。」

そう私は吐いた。確かに「博士の愛した数式」でも「冷たい」という印象はあった。しかし今回は冷たさの種類が違ったのだ。淡々と、とにかく淡々と。そして無機質。例えるならば「醤油の一切ない冷や奴」とかであろうか。文自体は読みやすく、すつと喉を通る。しかし食べても食べても、味という味がせず、ただただ、白く冷たいものが通っていくだけ。そんなところだ。

さて、私がこの作品を読み、ここに特筆したいことが二つある。

一つ目は、妊娠に対しての感情、ということだ。本作品では、「妊娠」からイメージするいわゆる「喜び」「幸せ」「おめでたさ」というような感情がほとんどと言って良いほど感じられない。かつて私の担任の先生に子どもができたときも、

理科の先生にできたときも、私たちはどちらとも、おめでたくそれを祝福し、本人たちも、とても嬉々とした表情を浮かべていた。それが当然のはずだ。しかし、本作品では、それがなく、むしろ望んでいないのではないかとも思える。この物語は「妊娠した姉」の「妹」の視点で描かれるが、この妹は姉にできた子どもを再々「染色体」だのと言う。全くもって子どもの可愛らしさやそういったものが感じられない表現だ。また、理系の私でも分かるほど、冷たくマイナスイメージが多々使われる。なぜだろうか——。しかしこの「冷たさ」というのが「二つ目」で語ることに相混じることでのこの物語に文学作品としての面白さというのを私なりに感じた。

では、二つ目。それはやはりラスト。「わたしは、破壊された姉の赤ん坊に会うために、新生児室に向かって歩き出した」についてだ。この物語では終盤、妹が姉にアメリカ産のグレープフルーツで作ったジャムを食べさせる。なぜ、わざわざアメリカ産かと言うと、アメリカ産のグレープフルーツには毒が含まれるというからだ。しかし私が調べた限りでは、「染色体を破壊する」などというほどの毒性はないようだし、実際には妹も心の底から信じているようには感じなかった。しかしはつきりと最後には、ああ書かれている。狂気といえはいいのだろうか、最後になって淡々とし、この作品にそれが加わるのだから、私はひどく怖さ、恐ろしさを感じた。「なぜこんな——」。まだはつきりとしたその答えは見つけられていない。だが、そこが一番おもしろいシーンであることは間違いない。

今まで私は読書感想文というと「僕もしつかりと頑張ろうと思いました」「友だちを大切にしようと思いました」などと締めていたが今回は、そんな感想が浮かぶ作品ではなかった。しかし私は初めて、「文学作品としての面白さ」というものがあるのだと分かった。感動が与えられるわけでもなく、人生についての命題が与えられるわけでもなく、しかし面白い。とにかく面白い。もっと本を読みたい、たくさん作品に触れたい。そんなことを思わせてくれた。

## 砂の女

安部 公房 著

環境都市工学科一年 笠井 梨瑚

「砂の女」を読んで —— 物語の余韻を考える ——

私は、圧倒的な非日常な光景でありながらも、現代に生きる私たちに通じる登場人物の心境や、人間の醜さをありありと浮かび上がらせるこの作品にとっても強い共感と恐怖を覚えました。

主人公は旅行で趣味の昆虫採集を行っていましたが、一泊させてくれると言う村人の嘘に騙され、砂の壁に囲まれた脱出不可能な家に村人の女とともに監禁されてしまいます。最初は、探している昆虫のことで頭がいっぱいだったはずなのに次第に主人公の心はどうやって脱出するか、といった内容や、自分を騙した村人への強い憎しみ、焦りで満たされていき、口調も次第に荒くなっていきます。そういったところに、簡単に変わってしまう人間の心と言うものを見たように感じました。

さらに、砂の壁に囲まれ、よじ登ろうとしても、ずるずるとすべって逃げ出せない、まさに人間用の蟻地獄と言わんばかりの非日常の光景と、監禁されどんなに喚いても、警察を呼ぶ、と脅しても顔色一つ変えない村人の女の非日常さ。そういうものが相まって、まるで読み手の恐怖や不安感をおおるようで読んでいた私は自分自身が砂の壁に捕らわれ、無法地帯に放り出されたかのように感じ、背筋が寒くなりました。

しかし、この蟻地獄のような風景を愛してやまない人もいます。この村では砂の壁に代表されるように砂ばかりです。毎日、砂嵐が吹き荒れ、屋根に積もった

砂を雪かきのように掃除しないと家は二日つぶれてしまいます。しかし、主人公が監禁されている家に住む女はこんなひどい環境の村を愛し、自ら望んで住んでいます。監禁された主人公は、村人と共に自分を畏にかけた女を憎んでいましたが、次第にこの村を愛する女に打ち解け、好意的な面を見せるようになっていき、ついには子どもを作っています。

こういった、人間の憎しみや恐怖の中に、対極ともいえる人間の愛という感情が物語の各所にちりばめられていることが、この作品にアンバランスな深みと面白さを感じさせてくれます。

物語のラスト、主人公は砂だらけの村では不足するであろう水の入手技術を確立します。こうして主人公は、村人に対して穴から、そして村から出してもらったための交渉のカードを手にします。

普通の物語であれば、村人たちにこの交渉カードを突きつけ、爽快に勝ち誇り村から出てハッピーエンドとなるもよし、再び村人の策略にはまり、ここからどうなるのだろうかと続きを期待させるもよし、と続くはずですが、この物語はここで終わってしまいます。主人公は同居していた女とそのおなかにいる子ども、そして監禁されるまでの暮らしのどちらも選ぶことなく終わってしまいます。こうして私たち読者は、その後の主人公の心境選択を知ることなく物語を読み終えることとなります。

私は、主人公がこの後どういう選択をするのか全く分かりません。この先の全く読めない余韻や、この余韻までにつながる登場人物の心境などが、物語をよりいっそう引き立てていると感じ、本当に素晴らしい作品だと感じました。

# グスコープドリの伝記

宮沢 賢治 著

環境都市工学科一年 内藤 千晴

「グスコープドリの伝記」を読んで —— ブドリたちの苦難 ——

自然災害は、なんて恐ろしいものだろう。

この物語の中では、多くの自然災害が起き、主人公であるブドリは、その苦難を多くの人々に助けられながら乗り越え、成長していく。そして最後には自分の命を犠牲にして、人々を自然災害から助けた。

ブドリが住んでいる村は冷害の影響で飢饉であった。そして父と母は森に行ったり帰り帰って来なかった。その後、妹もさらわれ、ブドリ一人になった。私なら母と父が居なくなってしまうと考えるだけで怖い。その上、大切な兄弟が自分の目の前から居なくなると思うと、考えたくなくらい悲しくて不安な気持ちになると思う。

その後、ブドリは優しい人々に助けってもらいながら成長していった。ブドリは、そんな人々に出会う事ができ、良かったと思う。なぜなら、様々な自然災害が起きる中、優しい人々に出会えたことでブドリは生き延びることが出来たと考えるからだ。

ブドリは、火山局技師のペンネン老技師に出会い、そこで働いた。火山の噴火を止めたり、窒素肥料を雨と一緒に降らせたり、人のために仕事をしていた。そうして最後の仕事となった、ブドリの父と母を奪った冷害が再び来て、その冷害からみんなを守るため自分の命と引き換えにして火山を噴火させた。私は、この

結末に衝撃を受けた。人の役に立ちたいという優しい気持ちは誰でも持っているだろう。しかし、ブドリは自分の命を失うと分かって人々を助けるといって誰にでも持っているのではない大ききさの優しさの持ち主だと考える。私はブドリの行動に感動した。ブドリの立場なら私はきつと同じ事はできなかっただろう。

この物語の作者である宮沢賢治さんについて調べてみると、作者自身も飢饉を経験していた。また、作者もブドリと同じように「自分より他の人のために」と大変優しい人だったらしい。私は、この事を知りブドリは宮沢賢治さんのような人だと思った。作者は、私たちにこの物語を通じて何を伝えたかったのだろうか。

私は、自然災害について伝えたいのではないかと考える。この物語が作られた時代と比べると、技術も経済も成長した。しかし、自然災害は今も発生し、人々を苦しめている。自然災害は、無くなることはなく、人に生と死という大切な、悲しく苦しいことを教えてくれるのではないかと考え、作者は私たちにこのようなことを伝えなかったのではないかと考えた。

また、「ブドリやブドリを助けた優しい人になりましょう」と言われているような気もした。私も、優しい心を持ちたいと思った。

この物語を読んで、物語の中には優しさが溢れているように感じた。私もブドリたちのように、勇気を持って、困っている人に親切にしたい。ただ自分の中で「大丈夫だろうか」や「手伝った方がいいだろうか」と思うだけでなく、行動に移すことが重要だと感じた。

また、日本も今自然災害が多く起きており、多くの方々が命を落とされている。だから私もブドリのように、将来自然災害から町を、人々を、動物たちを守りたいと思った。

この物語に出会い、本当の優しさとは何かを改めて考えさせられた。私は、この物語に出会うことができて良かった。私も、ブドリやブドリを助けた人々のように自分が大変でも人の為に何かするよう、優しい心の持ち主になりたい。

## 桜の森の満開の下

坂口 安吾 著

建築学科一年 玉川 千怜

「桜の森の満開の下」を読んで —— 桜はなぜ美しいのか ——

「桜の森の満開の下」。この題を聞いてまず頭に浮かんだのは、美しく咲き誇る、桜の花たちだった。しかし、この物語を読み始めた直後には、その情景は薄気味悪く、暗闇の中にぼよんと浮かぶ青白い桜の木に変わった。

まず、冒頭から、桜の花が咲いたことで、絶景だの春ランマンなどと陽気になるが、それは嘘だ、と今までの桜のイメージをいきなり覆えされた。そしてその後には描かれた物語は実に怪奇的なものだった。この物語の主人公は一人の山賊だ。いつものように旅人を襲おうとした。旅人は美しい女を連れており、男はその美しさに旅人を殺し、女を奪った。女は男に色々な要求をする。男の家にいた七人の女を器量の一番悪い女だけを残して殺せと言う。次に女は都に行きたいと言い、三人で都に移り住む。でも女はやりたくない放題で、男に毎晩人を殺し、その首を持ち帰らせ、その首で「首遊び」をするのだった。そんな生活に男はむなしくなり、山に帰りたいと言いだした。はじめこそ反対した女だが、男と一緒に帰ることに決める。男と女は器量の悪い女をのこして山へ二人で帰る。男は出会った時と同じように女を背負い山を登る。そして山の中の満開の桜の下にさしかかったとき女が鬼である事に気付く。男は鬼をしめ殺してしまおう。しかし、絞め殺したのは鬼ではなく美しい女だった。男は泣きわめき、女と男は消えてなくなった。読み終わった後、頭に浮かんだ桜は華やかな桜でも、気味の悪い桜でもなく、風にふかれて美しく、さびしく散っていく美しくも悲しい桜の姿だった。私はそ

の桜が、男と女の悲しい愛の形に感じられた。

前に書いたように、女は男に女たちを殺すように言ったり、首を取ってくるように命じたりした。普通の人ならまず、断るだろう。しかし、男は女の要求を全て聞いていた。それはやはり、男が女のことを愛していた証しだと思ふ。愛していたからこそ、女に嫌われたくないという思いから女のわがままを全て受け入れたのだと私は思う。

そして、女もまた男を愛するようになったのだと思ふ。女ははじめ、男の言うことなど聞かず、自分勝手にしていた。しかし、男が山へ帰りたいと言ったとき、女は「お前と一緒にどこでも暮らせる」と男に言っただけで山へ帰ることを決意している。

確かに、二人の愛の形は世間から見たらおかしいかもしれない。しかし、二人の間に存在したのは純粹な愛だと私は思う。最後の場面で男が女を手にかけて時、男はこれまでにないほど泣いている。かけがえのない人を自分の手でなくしてしまった、そんな気持ちから男は泣いたのだと思ふ。

ではなぜ、女は鬼へと変わったのか。私は女は鬼へと変わったのではなく、男が桜の木に持つイメージ、すなわち「恐怖」が、女の姿を鬼に見せてしまったのだと思ふ。そして恐らく、男もそのことに気がついたのだろう。己の弱さのせいで大切な人を失ってしまったのだ。これほどまでに男は女を愛していたのだと私は思う。

怖ろしさと美しさ、はかなさを持ち、悲しい愛の形をいくつも見てきたからこそ、現代に生きる桜の木々は、あんなにも美しく見える。この作品を読んで桜がなぜあんなにも美しいかが分かった気がする。

## 2年生の部

## 老人と海

アーネスト・ヘミングウェイ 著

電気情報工学科二年 宮崎 俊輔

「老人と海」を読んで —— 老人の覚悟 ——

課題図書の書名を見てもどの本が面白いかはわからない。一覧を見てふと目に留まったのが、今回読んだ図書だ。老人と海って何の関係があるのか、とても気になった。読んですぐに、漁師の話だと分かった。意外と簡単な答えだったため、別の図書に変えようとした。しかし、続きを少し読むとその先どうなるのか気になってしまい、気づいたらこの図書の魅力に心がひきつけられていた。

この本の魅力、それは「老人の覚悟」だと考える。

老人はある日、遠出をした。二匹の小さな鮪を餌に、大物をねらって。そして餌に食らいついたのが巨大なカジキ。そのとき、老人はまだその正体を押さえず、押込んだ時には舟よりも大きかった魚に呆然とした。四日にわたった老人と魚の闘いが終わった。舟に乗せることのできない魚。仕方なく、舟べりに縛りつけて帰るのだが、鮫が寄ってきて、港に帰ったときには魚の肉はほとんど食いつくされてしまっていた。

前述の話は、この図書の「老人の覚悟」が見えた部分だ。そしてその「覚悟」は二つある。

一つは「魚を殺す覚悟」。老人は魚と闘った四日間、怪我をして、めまいなどの体調不良を起こした。そんな状態でも、魚も自分と同じく苦しんでいる、諦めたら申し訳ないと考え、最後まで闘い抜こうとする姿勢に感動した。老人は魚を、

友達と言った。兄弟分だとも言った。おそらく魚も同じことを思っただろう。なぜなら、四日間も人間と過ごすのは初めてだっただろうから。老人と魚は互いに忘れることのできない存在で、それは、死んでも変わらないことだ。老人と、老人よりもはるかに大きい魚は網でつながれているだけではなく、心でもつながっていると感じた。

もう一つは「魚を守る覚悟」である。舟に乗せることのできない魚は、海に血を流してしまったために鮫が何匹も寄ってくる。鮫に魚の肉を持っていかれるが、ナイフなど舟にあるもので闘った。そんな、必死になって魚を守ろうとした姿勢に感動した。この大きな魚が一体どれくらいの値段で売れるのか、周りの人が見たらどう思うのか、気になったから魚をねらう鮫を殺そうとしたのかもしれない。いや、そうではなくて、友達であり、兄弟分でもある魚が、鮫にやられればなしなのが我慢できなかったのだろう。だから必死になって守ったのではないかと思う。

この図書を読んで、「覚悟」を持つことの大切さを学んだ。「覚悟」とは、ある事に対して嫌になっても途中で投げ出さないことだと思った。なぜなら老人は負けなかったから。今まで見たことのない巨大なカジキに、海の王者の鮫に対しても。命のある限り、下を向かず、前を見て闘った。

これから人生の中で色々な困難があると思うが、この図書で学んだ「覚悟」で乗り越えていきたい。老人のように、前を向いた姿勢で。

## 人間失格

太宰 治 著

環境都市工学科二年 小山 寛実

「人間失格」を読んで —— 辛さの裏返し ——

私は、『人間失格』を読んで、共感する文を見つけました。それは前半部分にある、「自分は、いったい幸福なんでしょうか。」以降の部分です。ここから始まり、その段落の最後までの部分、「実にしばしば、仕合せ者だと人に言われて来ました。自分ではいつも地獄の思いで、かえって、自分を仕合せ者だと言ったひとたちのほうが、比較にも何もならぬくらいずっとずっと安楽なように自分には見えないのです。」とありました。私はこの文に大きく心を持っていきました。

私は今、はつきり言つて、辛いです。それは、人間関係、学業、孤独、自己嫌悪、様々な場面から挙げる事ができます。私は、学生寮に入っており、そこで生活をし、学校に行き、そしてまた帰寮と、一年間のほとんどを実家から離れた場所で過ごしています。

学業に専念する事、自立心が育つ事、様々な人達と四六時中居れる事、とても恵まれていて良い環境ではないか、幸せ者ではないか、自分でもそう思うし、他人や家族からも言われますが、そんなの上辺だけでしか言えない事です。

それらの中身を見ていけば、たとえば自分を叱ってくれる人など居ませんから、学業でだらけてしまう時はとことんだらけてしまいます。友達と呼べる人など一人も居ません。価値観の違い、日常の過ごし方、私とはかけ離れた人達ばかりです。仲良くしたいとも思っていないです。それゆえに孤独感、大好きな家族と、地

元に居る沢山の友達と離ればなれになる恐怖感、不安、さみしき、挙げれば切りがない「辛い」を日常的な一つ一つの出来事のタイトルとすることが出来ます。

それを周りの人達は幸せだと言います。けれど、逆に私から他の人から〇〇が辛いんだ、と言われても、励ましたり、同情する事しかできません。しかしそれは、めんどうくさいとか、聞き苦しいとかではなく、やはり、個人の辛さはその人にしか分からない事だし、辛い事があるからこそ、人は忍耐力をつけながら多くを学んでいくと思います。

そう考え直して、私の辛い事を裏返していくと、自分一人で学業への意志が低下してしまうなら、もっと自分に厳しくする事もできるし、友達がいないなら、仲良くしたくないという気持ちを捨て、相手を尊重する気持ちを持ってほしい、家族や地元の友達と離ればなれで苦しいのなら、連絡をまめにとり、会える日には思いっきり甘えて、幸せを充電すれば良い。

こうやって辛い事を裏返せば幸せへの道が開けてくるのではないのでしょうか。最後の、家族や地元の友達と会えない辛さは、心が満たされるような改善策は自分と人との物理的な距離が原因なので、どうにもできませんが、幸せに近いものを探し出すだけでも気持ちが違います。その他の、自分の心の持ちようで改善できる事は、裏返して客観的に考えれば解決すると思います。辛さは他人にどうこう言うものではないと発見しました。それはただの自分の満足するための言い訳なのです。しかし、発散する事も大切ですから、時には甘えも必要です。

こんな事を考えると、この本の文章のように、辛さは人間の感情の中でもその人自身の嫌な事であり、逃げたいと思う事だと思えます。だから、辛さは自分の中で常に一番です。そうすると、自分は地獄のような思いの時に励ましの言葉をくれる人達の方がずっと辛くないと思うのは自然な事です。

辛さ、は人それぞれですが、その人その人に合ったもので、時には自分を苦しめるけれども、それを切り切るための思考力、判断力、経験、長い苦しみでも軽く考えれば、結局は自分のためになると、共感だけでなく勇気づけられた文章でした。

# 博士の愛した数式

小川 洋子 著

建築学科二年 空 舞花

「博士の愛した数式」を読んで —— 博士が愛したもの ——

この物語には、登場人物たちがお互いのことを思いやるあたたかい心が描かれている。

ある日、主人公である家政婦が博士（六四歳、数学専門の元大学教師）の家へ派遣される。博士は一九七五年に事故に遭い、彼の記憶はその年で止まっている。そして今の博士は記憶が八〇分しかもたない。そのため毎朝初対面であるかのように、博士の「君の靴のサイズはいくつかね」という同じ挨拶から一日が始まる。どちらもお互いに気を遣っていたため会話はほとんどなく、時々話すことがあればいつも「数」が関係する内容だった。しかし、博士が家政婦の息子であるルート（ $\sim$ ）と会ってからは変わった。ルートが学校から博士の家に帰ってくる時も歓迎し、家政婦とは数学の話ばかりでも、ルートには博士の方から「今日の給食は何だった？」とか「将来は何になるんだい？」などと質問した。でもやはり数学が好きな博士は、晝諭の仕事机や食卓で様々な数学の話聞かせてくれた。三人で過ごす日々の中でいろんな出来事がありながら、だんだんと友情が芽生えてくる。もしかしたら、数学のおかげでもあるのかもしれない。

わたしは数学が得意ではない。しかしこの本を読んでから、数学に対するイメージも変わった。特に博士の「問題を作った人には、答えが分かっている。必ず答えがあると保証された問題を解くのは、そこに見えている頂上へ向かって、ガ

イド付きの登山道ハイキングするようなものだよ。」という言葉にはその通りだと思われた。そしてこの本の中で初めて聞いた言葉「友愛数」。220の約数の和は284、284の約数の和は220。数学を勉強してきた中で、こんなにも「面白い」と感じたのは初めてだった。家政婦やルートがそうだったように、わたしも博士によって数学の世界に引き込まれた。

この物語の登場人物たちがお互いのことを大切に思いあえるのはとても素敵な関係だと私は感じた。博士に贈るプレゼントを「喜ばせたい」という純粹な気持ちだけで必死に探すルートや、ルートからプレゼントをもらった博士が素直に喜ぶ様子は心がとてもあたたかくなった。また、博士はいつもルートのことを守った。野球観戦でルートにフールボールが直撃しそうになったとき、ルートが包丁で怪我をした時。まるで自分の孫、いや、息子であるかのようにルートに接していた。つまり数学を愛するのと同じようにルートのことを愛していた。それは、毎回ルートのことを歓迎する様子や、自ら話しかけようとする様子から伝わってくる。なぜなら、家政婦には絶対しなかったからだ。

そしてもう一人、博士が愛していたのが、未亡人（博士の義姉）だと思う。未亡人は家政婦の雇い主でもあり、博士の住んでいる離れと同じ敷地内になる母屋に住んでいる。それだけ近くににいるのに二人はお互いに会おうとしなかった。実は、未亡人は事故の際博士の車に同乗していた。そして事故に遭う前、二人は愛し合っていた。事故の後、博士は未亡人のことをどう思っていたのか明らかになっていない。でも、事故に遭った年で記憶が止まってしまっただけで、その思いは消えてはいないはずだ。未亡人も事故の時、足を負傷したが気持ちは消えていないと思う。だからこそ未亡人が博士の兄と一緒にあったことが引掛かるところだが、兄が他界した後、近くで博士を見守っていたことに間違いはないと思う。もしかしたら二人は心で通じあっていたのかもしれない。

博士のように不器用なりにまっすぐ何かを愛することができるのは素敵なことだ。

# 銀河鉄道の夜

宮沢 賢治 著

建築学科二年 塩田 綾音

「銀河鉄道の夜」を読んで —— 言葉による想像の可能性 ——

私は、今回この小説を初めて読んだ。私がこの小説を選んだきっかけは二つある。一つ目は、以前からこの小説の作者である宮沢賢治に興味を持っていたからだ。中学のとき宮沢賢治について習ったことがあった。そのときから、宮沢賢治の書く物語をいつか読んでみたいと思っていた。二つ目は、小説の題名に惹かれたからだ。私は月や星、流星群など宇宙に関すること・ものが大好きだ。だからこの小説の題名の「銀河」という言葉に強く惹かれ、是非この機会に読んでみようと思った。

この小説の中で印象に残っているのは、銀河の旅の最後に突然カムパネルラが消えてしまった場面である。カムパネルラとは、この物語の主人公ジョバンニの親友だと思われる登場人物だ。カムパネルラは消える前に、列車の窓から見える遠くのきれいな野原を指し、

「ああ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集っているねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのおかあさんだよ。」

と叫んだ、と書かれている。しかし、ジョバンニにはほんやりと白くけむって見えるだけで、カムパネルラの言ったようには見えなかったと続けられている。このことから、会話に出てくるきれいな野原はカムパネルラにしか見えていないのだろうと考えた。さらにカムパネルラが指した方向を「ほんとうの天上」と言っ

ていることから、この時点で既にカムパネルラには天上、つまり死後の世界が見えていたのだと考えた。また、この場面がある第九章の冒頭で、ジョバンニは身に覚えのない、切符として扱われる「いちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもの」を持っていた。同じ列車に乗っていた鳥捕りはその紙切れを見て「どこでも勝手にあるける通行券」と言った。また、ジョバンニたちのところへ来た車掌や燈台看守の態度も、どこか丁寧になったり珍しいものを見たように書かれていた。この二つのことから、ジョバンニの持っていた切符はなにかとても特別なものであると考えられた。

以上のことを踏まえ、ジョバンニが乗ったのは天上の世界へつながる列車で、一緒に乗っていたカムパネルラも含めジョバンニ以外の乗客はもう亡くなってしまった人たちだということ、ジョバンニは特別な切符を持っていたので天上の世界へは行かず現実の世界へ戻れたということが、この場面とのつながりであったと推測した。この小説の大部分を占める銀河の旅の終わりが衝撃的で、読み進める中で想像しなかった結末だった。

また、表現する言葉の美しさもこの小説に引き込まれた一つの要素だと思う。例えばアルビレオという星について。この星は、はくちよう座に見られる青とオレンジの二つの星から成る珍しい星だ。本文では「眼もさめるような、青玉と黄玉の大きな二つのすきとおった球」と表現されており、読みながら情景を鮮明に想像することができた。他にも波や鶴の鳴き声など、小説のどこどこに宮沢賢治の綺麗な表現がちりばめられていて、読み進める度に感動した。

この小説の中には、明確に名称が書かれておらず、言葉による表現のみで書かれているものがあつた。それにより読み手それぞれの想像・とらえ方によって自分だけの『銀河鉄道の夜』の世界が頭の中でつくりあげられていくのだろうと感じた。また、その世界を作り上げていく感覚が今まで味わったことのないもので、この本は私にとって言葉による想像の可能性を大きく広げてくれた大切な一冊となった。



3年生の部

## 科学技術のゆくえ

加藤尚武, 松山壽一 編

機械工学科3年 西村 貴輝

もしロボットが自分で自分のスイッチを入れ、与えられたプログラムを書き換え、本来の目的と異なる動作をしたらどうなるのだろう。この本を読んで、今まで考えたことのない疑問が頭に浮かんだ。

ロボットには通常、ある目的を達成するためのプログラムが存在し、ロボットはそのプログラム以外の動作はできない。これを自然主義とすると、私は当然自然主義者となると思っていた。しかし、反自然主義も理論上は存在する。これはロボットが与えられたプログラムを書き換えることができることを意味する。言うなればロボットが意志を持つのである。

私は最初、反自然主義はロボットが人間に近づく考え方をしており、いつかはロボットを家族の一員としてみられるのではないかと感じた。しかし、「反自然主義が可能であるとする、技術が目的設定について外部からどのような制約も受けることはなくなるので、技術自体がどこに向かっていくか、まったく分からないということになる」という言葉から、一瞬にして恐怖に陥ってしまった。今の私に限らず、多くのロボット製作者は反自然主義者なのだと思う。この言葉を知らずしてロボットは作れないからこそ、今の私が目指していること、やろうとしていることの重みが分かる。

日々技術が進歩していく中で、自然主義の復活はできないかと私は考えたが、今の技術は原子核や遺伝子でさえ操ってしまう。そんな技術に向かって「自然へ帰れ」などと言っても無意味だと主張され、どうしようもない気持ちになった。新しい技術を求めるが故に反自然主義になってしまい、自分の技術によりできたロボットに対して、技術的に何もすることができなくなってしまふ未来が、自分にも来るのではないかと思う。

このような未来へ進んでゆく私や技術者達は、もっと視野を広げる必要があると思う。ロボットができた数十年先の未来を想像し、自分の技術によってどんな問題が起こるかを見通すことで、今の自分がどうあるべきかを考えることができると思う。自然主義が復活できなくても、自然らしさを設計できる技術者であるべきだと思う。

具体的な例として「二〇四五年問題」がある。二〇四五年にコンピューターの人工知能の能力が人類を越え、人工知能が支配するのではないかと予測されている。技術者として一番の課題である。便利さを求めるが故に、コンピューターも進化し、最終的に自分達にはどうすることもできなくなるのは、反自然主義の末路なのだと思う。この本を読み、この問題について考えると、自分が今まで作ってきたものは何のためにあるのだろうと思う。ただし、言い換えると今までよく考えなかった問題について真剣に取り組むようになった。これからどうなるか、答えが分かりそうになくても、考えること自体が大切なのだと思う。

だから私は考える。今まで考えもしなかったことを。そして一つの考えが浮かんできた。反自然主義にしても、二〇四五年問題にしても、自分達と共存できるロボットが作れたとしたら、互いに支配し合わずに生きてゆけるのではないかと思う。この理想の実現のため、必要な知識を授業や本など、様々な場で吸収していこうと思う。そしてこの考え方を世の中に発信し、共感する人達と共に研究していこうと考えた。まだまだ歪んで甘い考えかもしれないが、この思考を持つこと自体、この本を読んだ大きな意味となった。これからの科学/技術を担う自分の責務の大きさを感じ、自分のため、未来のために自分の技術を磨いてゆき、自ら問題解決に取り組もうと思う。

## 置かれた場所で咲きなさい

渡辺 和子 著

電気情報工学科3年 徳広 怜二

私は渡辺和子さんの「置かれた場所で咲きなさい」を読みました。この本は、自分にとって嫌な環境に対しての考え方や、新しい自分の見つけ方が書いてありました。その中でも、私が一番勉強になったのは、自分の中にいるのに自分ではない自分がいるという考え方です。

その自分は、善い行いをすべきか悪い行いをすべきか迷ったとき、善い行いをしよう背中を押してくれる存在だといいます。私はそのようなことを考えもしていませんでした。作者は、ある詩集からこの考え方を得たそうですが、私はかなりひねくれている人なので他人の考えをすんなりと、受け入れることができません。作者の心の広さが私と全く違うことがよく分かります。

他にも、くれない族だった作者を変えた詩には、自分から動くからこそ幸せを得られるといったことが書かれていました。これも、いつも受け身でいる自分とは程遠いと思います。作者はこの様な経験や考えを出会いから得ています。私は出会いはあまりないので、うらやましく思います。

ここで私と作者は、人として根本的な違いが二つあります。それは、人を信じることができるということと、他人の声にいつも耳を傾けているということです。この違いは作者が人間としていかにレベルが高いか、私がか人として愚かであるかを表しています。

まず信じることは、人と関わっていく中でもっとも重要なことだと思います。私は、少年時代に友達といえる友達がいなかったのも、誰かに何かを頼むこともできず過ごしてきました。そして今では、人を頼るときにどうしても信用しきれません。いつも疑ってしまい、相手を傷つけることもあったと思います。経験を言い訳にしていると言われることも承知しています。作者の、相手の成功をほめて相手の失敗は自分が被る、というほど覚悟と信頼をもって人を頼るといった姿勢をもつことは、私が見習うところです。

また作者は相手だけでなく、神様も信じています。修道院に通っていたこともあります。並の人ができる信頼ではありません。直感や夢までも、神の仕業であると信じて従うのです。私であれば、直感は夢に対しては怯えることしかできません。私は人としての差を知らされました。

そしてもう一つ、他人の声に耳を傾けるということに関しては、信頼と類しますが例を紹介します。作者は他人の声を聞くことだけでなく、その意味についても考えることができるのです。これは私には到底できないと思っています。詩を読み、その表現について考え、意味を知り、自分の行動に移すのです。例えば、求めれば与えられるという言葉があります。私は努力をすれば、何でも手に入るという解釈をしました。しかし作者は、本当に欲しいものであれば、相手に与えられるようになるという解釈をしました。比べずとも差が分かります。私が傲慢で、作者が謙虚です。なので私も素直に、謙虚に受け入れることが必要です。

これが自身の中の自身でない自身の違いなのです。自分自身を信じ、相手を信じ、神を信じて生きる。そんな作者とは対照的な私のすべきことは、私ではない未知の存在を受け入れ信じることです。私はこの本を読んで、自身の精神的未熟を痛感させられました。「置かれた場所で咲きなさい」に込められた想いを知った今、自分自身が変われるように努力をし、いずれは作者のような人になりたいです。そして作者の書くような、人を変えられる本を私も書けるようになりたいです。

## しんがり

清武 英利 著

環境都市工学科3年 岸本 誠矢

しんがりは、一九九七年十一月、当時四大証券と呼ばれた山一証券が日本経済新聞の朝刊一面に「山一証券自主廃業へ。負債三兆円、戦後最大」と見出しが出たところから始まった。大企業が一夜にして、自主廃業となって社員達には混乱が広がった。将来安泰だと思って入った大企業で、突然給与が出なくなるということだったから。そんな、ほとんどの社員が再就職に忙しい中、会社に踏み留まろうとする社員がいた。会社に踏み留まって経営破綻の原因を追究し、清算作業をした社員がいた。真相を究明するために、最後まで会社に留まったしんがり社員たちの懸命な闘いを描いた実話である。しんがりとは、戦に敗れて退くとき、軍列の最後尾に踏みとどまって戦う兵士のこと。多くの兵は逃れて再起を期す。金ももらえないのに、最後まで会社に残り真相究明するのである。何故最後まで筋を通そうとしたのでしょうか。山一が消えた後の元山一社員は不幸ではなかったと言います。会社の破綻は人生の通過点に過ぎない。潰れたって、何とかなるんだ。一生懸命生きていれば誰かが見ている、むくわれる時がくると信じていることは、リスク多き時代を生きる人に励ましになる。しんがりをする人達、自主廃業する人達は、三つしなければならなかったことがあった。一つ目は、営業を停止し、本支店を閉鎖すること。二つ目は顧客から預かった二十四兆円の株券や資産を早急、かつ正確に返還すること。三つ目が債務隠しの真相を暴く社内調査である。社内調査委員会を組織し、破綻原因を究明する組長の嘉本と、パソコンに強い横山、業務管理課長の印出、調査報告書作成を手助けした長澤など嘉本の周りには、頼れる仲間がたくさんいました。山一で働いていたからこそ、最後まで苦難を乗り越えれた仲間ができたんだと思います。嘉本は、元社長や、経営部長などヒアリングを何回も行いました。清算業務と約二千六百億円の債務を究明するためです。会社に対する執念と、努力で証拠となる書類や、証言を獲得していった人だだと思います。

学校生活の部活動でも同じ様なことが言えるだろう。学年や、学科が違う人が集まるから全員が集まるのは難しいし、統制がなかなかとれない。僕が所属しているラグビー部は特に団体競技なので、チームの問題は多く起こる。試合の時は、特にチームでのルールと一人一人の責任が大きくなっていく。一丸とならないと守れないし、一人が逃げるとチームメイト全体に迷惑がかかる。信用関係も必要だ。これはまかせる、まかせろでないと、試合が成り立たない。相手を尊敬して本気でぶつからないと、試合として成り立たないし、失礼である。それらを育むために、日々の練習は必要である。日々を毎日頑張る練習する人は、周りからの評価もいいし、信頼される。味方の人の得意、不得意が分かれば互いをカバーし合える。一年生から、五年生の役割もしっかりしている。一年生は、先輩から学ばないといけない。先輩がしっかりしなければチームとしては成り立たなくなる。互いのことを理解し、日々からの行いで信頼関係もあるから試合などの本番で、チームとして一つの大きな力で立ち向かえる。苦しい練習を乗り越えての、仲間である。苦難を乗り越えた仲間は一生ものなのだと思います。

内部のチェックや批判を許さない部門をつくってしまい、暴走を止められずに歯止めがきかなくなり、暴走を許すトップに何の意見も言えない下っ端の人達の苦悩を描いた本でした。元山一社員は再就職に困らなかったというデータがある。社内調査をしっかり行い責任の所在をはっきりさせて、社員はしっかりしていたことがしっかり証明されていたからである。最後まで自分が働いてきた会社のためにつくそうとする心意気はすごかった。会社が倒産しても次のステップが大事である。

## みんなでつくるバリアフリー

光野 有次 著

建築学科3年 古田 花那

「バリアフリーって何だろう。」私がこの本を手にとって初めに思った印象だ。最近、私たちは日常生活で「バリアフリー」という言葉を耳にする。私がこの本を読む前に思っていたバリアフリーは、床にある段差をなくすものというイメージだった。もっとバリアフリーについて詳しく知りたいと思いこの本を選んだ。

この本の内容としては、筆者が体験したバリアフリー住宅についてのことや、日常生活におけるバリアフリーの道具や施設についてのことが筆者の感想も交えながら書かれてあった。車いすに乗る人や目の不自由な人、高齢者など誰もが活動しやすい家や街になっている。誰もが暮らしやすいようにとつくられたバリアフリーの例として挙げられていたのは、地下鉄の乗換案内やホームから転落してしまわないための柵、超低床バスや電車などがあつた。地下鉄の乗換案内図には、何両目に階段があるかが示されているので、下車するときが一番近い階段がある場所が分かり、その車両に乗車することができる。これは歩くのに支障がある人や体の弱い高齢者にとってとても助かる。超低床バスは待っている歩道とバスの床の高さの差があまりないため、車いすに乗る人や小さな子供、高齢者などの負担が解消される。私は以前車いすに乗っている人がバスに乗車しているのを見たことがある。そのバスは段差があり、人の手を借りて乗車していた。乗るのに時間も手間もかかっていて大変そうだった。そして何も手伝えることができない自分にとっても腹が立った。でも、段差のないバスがもっと普及していけば一人で楽に乗車できるのもっと増えればいいなと思う。

この本のさまざまなバリアフリーの話を読んで、中でも一番印象に残ったのは家についての内容だ。この内容は筆者がバリアフリーの住宅に訪れた時、この住宅の設計は車いすを使う人を中心に考えられたものであつたということが書かれていた。私の家も最近バリアフリーの住宅になつたのでこの話にとっても興味を持ったからだ。

私は小さい頃から祖父母と一緒に暮らしている。祖母は私が小学生の時くらいから足腰が悪くなり、歩くとき片足を引きずるようにして歩いている。そのため、リビングと廊下のあるわずかな段差でもまたぐのが大変そうだった。しかも、祖父母の部屋は二階にあつたため、毎日傾斜が急な階段を上り下りするのも大変そうだった。数年前、リビングの床がきしんで危なくなつたので、リフォームをすることになった。すでにある床の上に新しい床を敷き、廊下にも同じように板を敷くことで、リビングと廊下の段差をなくすことができた。ついでに他の部屋も手すりを付けたり、段差をなくすリフォームをし、バリアフリーの家になつた。その時に、祖父母の部屋を一階に移動させ、祖父母たちにとって前より住みやすい家になつた。

この本を通してバリアフリーに対する気持ちが大きく変わり、自分が今まで気に留めてなかつたことでも、体や目が不自由な人にとってはとても大きな障害であることが分かつたので、困っている人がいれば小さなことでも手伝えるようにしようと思うようになった。私は今学校で建築を専攻している。授業で住宅の設計をするにあたり、自分の感覚に合わせて設計していた。だが、これからはどの世代でも快適に、不自由のない暮らしができるような住宅の設計をするように心がけていきたい。

## 4年生以上の部

## 冥土めぐり

鹿島田 真希 著

機械工学科4年 市川 将

人間は何かに関われて生きていくものなのだろう。過去、現在そして未来——。それらは何かしらの感情を持って、「記憶」として私たちを拘束する。それらが今の幸せを、今の、これからの自分を作っているのだとしたら、それは良いことなのかもしれない。

この作品には二つの対極する時間軸が存在すると感じた。「今」という時間軸と、「過去」という時間軸。お互いに干渉し合っているのに、身をもって感じるこのできないもの。しかしそれらは確実に自らを記憶という形で縛りつけている。

具体的に何が対極なのかというと、主人公の奈津子と旦那の太一の夫婦と、奈津子の母と弟の二組の存在だ。奈津子らは「今」を、母親らは「過去」を生きていると感じた。

彼女は夫の療養のため、とある古いホテルへやってきた。そこは昔母親が祖父母と行ったことがあり、また彼女も訪れたことのあるホテルだった。あんな高級ホテルが、今じゃたったの五千円で泊まれてしまうなんて、なんて落ちぶれようだろうか。彼女は療養と同時に、「過去」を振り切ろうと考えてここへやってきた。しかし思い出すほどに心は辛くなってゆく。それと同時に過去を顧みたとき感じるのは、今こうして彼と一緒に居る、彼のために何かしてあげたいと思うことが今の幸せなのかもしれない、と感じていた。それは彼女が「今」という時間軸を生きているからではないだろうか。

母は元スチュワーデス、弟は酒癖は悪く、金遣いが荒い男だ。彼女らは煌びやかだった過去にとらわれたままで、「今」を見ようとはしない。

人間誰しも過去の栄光に縋りたがるものだ。それが自身の最高点であるが故のことだが、そこから前に進めないとなると、大変な重症だ。所詮過去は過去でしかなく、それが今に少しでも影響すると思えば、多少は前へ進めるのではないだろうか。自分を大きく見せることは必要かもしれないが、いつまでも過去の栄光に縋っていては、小さいままなのではないかと、読みながら考えた。

私自身に重ねたとき、どちらかというとな津子に近いと感じた。思い出されるのはあまりよくない思い出ばかり、しかしそれでもふとしたときに幸せを感じる。そんな生活を送っているからだ。逆に考えると、縋る程の栄光や成果を残していないからということもある。

平凡で、持っているものが少ないからこそ、何か（幸せのようなもの）を見つけ出すという力は人一倍あるのかもしれない。生きてくと言うことは、そういうことの連続なのかもしれない。というのは、最初から恵まれた人など稀で、好都合なことばかりではない。嫌々ながらもその中にやりがいや、幸せを見つけ出していく、そういうものなのではないか。

「過去」も「今」も確実に現在の自分、そして未来の自分を形作っている。それはきっと感じるこのできない程、早く、静かに形成していく。そして時々休んでは振り返る。何故なら目の前がまだ暗く、不確かだからだ。この先どうするべきか、何が今の幸せなのか、知らず知らずのうちに、自らに問いかけているのだろう。

人は何かに関われて生きていくものなのだろう——。最初にそう述べたのは、奈津子も完全には過去を振り切ることが出来なかったからだ。「自分」という母体は「過去」にも「今」にも左右されながらでしか存在しないからだ。それがなくなったとき、何か一つの境地に達するのかもしれないが。

きっとその囚われから解放されることはありえないだろう。でもそれを毎日感じるのは疲れてしまうから、何かの瞬間に、「これかな」と感じられたら、それだけでも十分良いのではないだろうか。

## 平成28年度 校内読書感想文コンクール 講評

## ○平成28年度選考委員

四・五年及び専攻科選考担当

笠井 聖二 (委員長)

山田 祐士

三年選考担当 木原 滋哉

二年選考担当 上芝 令子・外村 彰

一年選考担当 板倉 大貴・外村 彰

## 読書感想文 総評

自然科学系分野 笠井 聖二

本年度も校内読書感想文コンクールを無事に実施することができました。応募してくれた学生諸君及び実施にご協力頂いた関係の皆さんに感謝いたします。

しっかりと取り組んでくれた結果、少しずつ質もよくなっているのではないかと思います。懸案である4年生以上の応募については、0件を脱することはできましたが、改善したとは言い難い状況です。次回に向けて、校内読書感想文コンクールを通じた新しい展開なども議論しながら、本校での「読書」を盛り上げていきたいと思いをします。

## 一年読書感想文 講評

非常勤講師 (国語) 板倉 大貴

なんのために読書感想文はあるのか？ この問いかけから一年生の読書感想文の講評をはじめなければならないように思います。この問いかけにたいする私という限られた思考からの回答は次のようなものです。それは、自分自身であるとともに、住みなれた居心地のいい場所でもある自らの思考を、違和と疑問のなかに飛び込ませ、それらにとりかこまれた窮屈さのなかで、手がかりさえ杳としてみつけられない状態で、あらためてもういちどみつめてもらいたいということです。

今回の一年生の課題本はおもに芥川賞受賞作のなかから私が選びました。昨今ではあまり読まれなくなった作品がほとんどです。一年生のみなさんは馴染みのないこれらの作品に苦勞されたと思います。しかし、さきほど述べたような違和と疑問にかこまれて、そのなかで、自分の考えをしっかりと記してくれたように思います。ほんとうにさまざまな感想、視座や表現がありました。た

だ、そのなかで多くの生徒がおなじように行っていたことがあります。それは作者の考えを読みとろうとすることでした。もちろん作者の考えや意図を読みとくことは重要です。ですが、その作者の考えも、その作者の生きた時代や環境などによって形づくられているのであり、絶対的なものとはいえません。ですので、作者の考えを読みとることを最終到達地点にしないことも重要だと思われまます。今回、優秀賞の候補作を選ぶにあたっては以上のようなことを勘案しました。つまり、作者の考えを読みとるだけではなく、それにたいする自らの思考のあとや批評があることです。もちろん提出いただいたほかの感想文にそれがないことはありませんが、とりわけ選出された六作にはそれぞれ独特の思考のあとがあると思います。……これからもみなさんには知らない場所に自らを投げこんでいってほしいと思います。自分という骰子は手を放してみないとどの目がでるのかわからないものですから。

## 二年読書感想文 講評

人文社会系分野 上芝 令子

二年生は課題図書をこちらで設定して、その中から選んで感想文を書くという形で実施しました。今年の二年生は、なんと前期授業期間に「現代文」の授業がない！という日本の高校生としてはありえない状況で、古典の時間になぜか現代文の読書感想文を夏休みの課題として出すという不思議な状況の中、それでもほぼ全員の学生が期日を守り、提出しました。できればすべての作品に触れてほしいと思いつながら選定した23作品は洋の東西を問わず、古今のいずれも名作ぞろい。今この時期にこそ読んでほしい作品ばかりです。23作に加え三作品、全国読書感想文コンクール（高校生の部）課題図書も加えました。『銀河鉄道の夜』『博士の愛した数式』『夜のピクニック』『きよしこ』などが比較的多く選ばれ、『星の王子さま』も目立ちました。三浦綾子『塩狩峠』などはぜひと思ひ、入れましたが、感想文に選んだ学生はほぼおらず、がっくり、でしたが。数学が嫌いだ、好きだという学生が、それぞれ『博士の愛した数式』を読み、各々違った角度から作品を考えているところも興味深かったです。感想文の書き方というものは、本来は存在しないのですが（「自分の感想」を書けばいいのですから）、それでも、「なぜ？」「どうして？」という問いが生まれながら、その答えを「作者にしかわからない」とつなげられると、やはり、それは感想文としてはどうかな、という気になりました。答えは探してみしてほしいのです。正解は自分の中でこれだ、と思えればそれが正解です。用意されている答えを見つけるのではなく（作者にだってわかっていないかもしれません）、答えに至る思考の道を努力して生み出してほしいと思います。今年度の二年生優秀作の選考には他の先生方にも加わっていただきました。作品と自分の経験とを結びつけて考え、自身の内面を明らかにしようという懸命さが読み取れる感想文が選ばれたと思います。

## 三年読書感想文 講評

人文社会系分野 木原 滋哉

3年生の課題は、評論やノンフィクションの作品を自分で選んで、感想文をまとめるというものでした。評論を取り上げた感想文では、現代社会の課題に鋭く切り込んでいるものに心動かされました。ノンフィクションの作品を取り上げた感想文の中には、自分たちとはかけ離れた生活を知って、自分たちが幸せだと感じた、とまとめたものがあり、少し気になりました。自分とどんなに違っていても自分たちと共通しているものを見出して自分の問題をして取り上げた感想文、現代社会の課題や仕組みに光を当てた感想文を評価して、表彰したいと思います。インターネットが発展している現在、自分に心地よい情報しか目を向けず、異なる意見に耳を閉ざしがちです。異なる意見と対話しようとする姿勢を高く評価したいと思います。

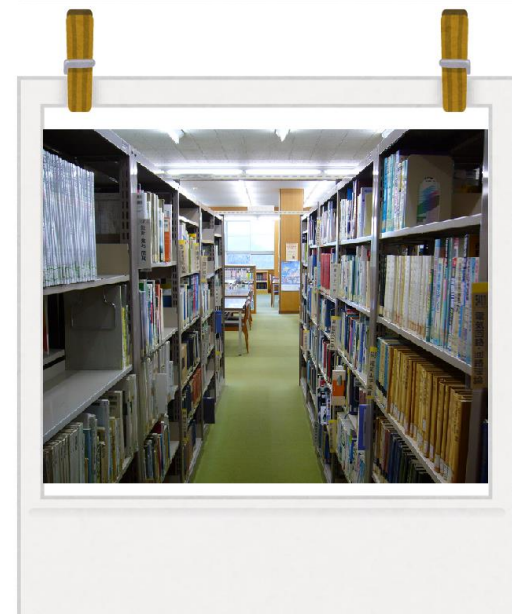


## 四・五年及び専攻科読書感想文 講評

機械工学分野 山田 祐士

4年生以上の部は、これまでに何度も応募ゼロの年がありましたが、今年は何とか1人の勇敢で冒険心のある若者が応募してくれましたので最悪の事態を免れることが出来ました。作品は標準以上の評価と応募者が1名であることに対する様々な審査員の思いから入賞はすぐに決定しました。しかし、応募者が1人なので、講評も何もないだろうとも思ったのですが、来年度の応募者を増やすための対策を纏めるため、あえて文字を立てることにになりました。なぜ呉高専生は4年生になると途端に読書感想文を書かなくなるのでしょうか？個人的な考えですが、小学生の時から夏休みになると宿題で読書感想文をずっと書いてきた本校の学生達が、理系エリートの大高専に入ってしまったばかりに（又は「入ったのに」）さらに3年間も宿題でやらされてしまい、もういいよと思っているのではないかと考えています。

こんなに長くしてきたこともあり、今回の受賞作品もみな素晴らしい物ばかり、このように上手な人がたくさんいるのにみんなが一斉にやめてしまうと当然勿体無いし寂しいと思う図書の職員や先生がたくさん出て来て当然。このような流れで、何とか勿体無いを止めて、自然に「授業の課題」としてではない読書感想文を書いてもらおうと考えた時、誰か人に「これはおもしろいよ」と伝えたい気持ちになるような素晴らしい本に出会うことが出来れば、言葉が自然と文章になり読書感想文を書くことができるのではないかという考えに至りました。まずは、そのような本に出合える図書館やブックハンティングに行ってみたいと思いませんか？





## 行事報告 平成28年度ブックハンティング

学生会 文化環境委員長

三京拓弥

今年度より年に1度の開催となったブックハンティングが、6月19日(日)に行われました。場所はジュンク堂書店(広島駅前店)に1~3年生、4~5年生、専攻科生の2班に分かれ、学生31名、教職員3名でおじゃまさせていただきました。

今年度より休日の開催となり学生達には忙しい中で参加して頂きましたが、色んな本を手にとったりし、熱心に本を選んでいる様子が見受けられました。予算は1人1万円でしたが専門書には高価なものも多く、

更には種類も多彩であるため、どの本を購入するか選ぶのにとっても苦戦しました。

なかなか普段買えない本を選んで買ってきたので学校の図書館に並べられるのを楽しみに待っていて下さい。

なお、ブックハンティングに必要な経費は後援会から支援していただいています。

ありがとうございました。



## ブックハンティング図書紹介

### 虚数の情緒

S. K

僕がこの本を選んだ理由は、数学や教育等を詳しく分かり易いことばで書かれているからです。

すごく分厚い本ですが、とてもおもしろいです。

### バケモノの子

M. I

バケモノと人間という奇妙な師弟関係の2人が修行と冒険の日々を重ねてともに成長するというお話です。細田守監督の作品で、映画があって興味がありバケモノの世界という違った世界観を楽しめると思って選びました。

### キー入力が見るみる速くなるタイピング上達の法則

F. N

これからの学習にタイピング技能は必要不可欠な物だと思い、この本を選びました。

### DIARY of a Wimpy Kid

S. N

『グレッグのダメ日記』という日本語版の児童書のオリジナルです。とても面白い内容の本です。児童書だから難しい単語はあまりないようで、英検三級~準二級、TOEIC 入門レベルの本です。絵本よりもっとおもしろい本を勉強がてら読みたい方は是非挑戦してみてください。

**書店ガール**

M. Y

書店のアラフォー副店長理子は、はねっかえりの部下亜紀の扱いに手を焼いていた。協調性がなく、恋愛も自由奔放で、仕事でも好き勝手な提案ばかり。一方の亜紀も、ダメ出しばかりする「頭の固い上司」の理子に猛反発していた。そんなある日、店にとんでもない危機が…!?

本好き、書店好きの人はぜひ読んでください!

**Hacking: 美しき策謀**

T. K

パソコンが好きな人は誰も一度はハッカーに憧れたことがあると思います。そのハッカーの思想や美学、テクニックについて解説してあるのがこの本です。芸術の域まで高められたテクニックをお楽しみください。

**ドグラ・マグラ**

M. K

「日本三大奇書」の一つであるこの本には、伏線が複雑に織り込まれており、読む程に味わい深い本です。

この本の魅力は、内容の濃さと夢野久作独特の文体にあります。

読めばきっと、貴方もやみつきになるでしょう。

**インフェルノ**

Y. Y

この本は難事件に芸術から迫っていくサスペンス小説です。

今回題材となるのはダンテの「神曲」で、ダンテの「神曲」に描かれたわずかなヒントや細かい伏線が特徴の読み応えある大作です。

是非読んでみて下さい。

**ブルターニュ幻想民話集**

R. M

フランスの歴史的な州ブルターニュで語り継がれてきた民話集です。独特な文化を持つブルターニュの「怖い話」を97話、楽しめる作品になっていると思います。

**不惑のスクラム**

K. O

ラグビーというスポーツの認知度が上がってきている今、この本を読んで欲しい。

ラグビーというスポーツが持つ熱さ、爽やかさそしておっさんの情熱を確かめられる一冊です。

**偏愛的数学 I 驚異の数**

A. Y

難しい演算ではなく、たし算やかけ算といった四則演算で、驚くような性質を持つ数を集めた本です。「偏愛的数学」という思わず目を止めてしまうタイトルが魅力的です。

**火星の人**

R. H

火星の人は、2015年に映画化された実写映画の『オデッセイ』の原作です。絶望的な状況でも諦めることない主人公に心動かされます。同時に英語版もあるので、合わせて読むのもいいでしょう。

**お散歩しながらフランス語**

T. T

フランスに留学したい、行ってみたいと思っている人は多いと思います。

でも、フランス語が分からない! そんな人におすすめの本です。

この本では、パリに在住している著者が実用的なフランス語を集めています。

サイズもとても良く、写真などもあり、分かりやすく、勉強になる一冊です。

**カリスマ経営者の名著を読む**

R. O

ホンダや京セラなどの優れた企業の優れた経営者自ら書いた名著のエッセンスが凝縮されている1冊である。エンジニアを目指す者にとって読んで損はないのではないかと思う。

**コンビニたそがれ堂**

K. M

思い出の大切さを感じられるとても読みやすい短編小説です。

大切なものを探している人が入店できる不思議なコンビニ「たそがれ堂」

ときに切なくときにほんわかした商品を提供してくれる不思議なコンビニなのです。

**サブマリン**

Y. M

映画化された話も収録されている「チルドレン」の続編です。

「チルドレン」を読んだことのある人、伊坂さんの本が好きな人、オススメです。

**たのしいバイナリの歩き方**

N. K

高専生ならプログラムというものに多少触れたことがあるだろう。C、VBA などプログラム言語は無数に存在するがその根底にあるアセンブリ言語を是非学んで欲しい。また違った視点でプログラムを覗けるに違いない。

**[入門] ‘株’ の仕組み**

R. S

高専を出て起業しようと考えている方も少なくないと思います。起業するには、運用するお金はどうするかというのは各々調べるのかと思います。しかし、インターネットで学ぶには情報が多すぎます。そこで、まずはピンポイントに株式や会計といった、お金に関することから学んでみてはどうでしょうか。

**悪魔の辞典**

R. K

今から 100 年以上前の作家でありジャーナリストでもあったアンブローズ・ピアスによる書籍です。文庫本でありながら、実際の辞書のように読めるところがオススメです。

また、内容も悪魔視点なのでおもしろいです。

**怪盗探偵山猫**

Y. A

これは金などを盗む怪盗と会社の悪事を証明する探偵の 2 つの顔を持つ山猫によるミステリー。

「八雲」シリーズの作者・神永学さんの、ドラマにもなった小説です。

**目は1分でよくなる！**

K. M

パソコン、夜遅くの勉強、スマートフォン、目を酷使してしまう高専生の貴方に。そんな選出です。

明るい場所で、適度な距離で、肩の力を抜いて、ご利用下さい。

**C#による iOS、Android、Windows アプリケーション開発入門**

H. H

いつまでコンソールアプリで満足しているつもりだ！！時代は GUI だ！！といった人におすすめです。

とっつき易い C# と Xamarin でアプリ開発始めてみませんか？

**ひとりで学べる環境計量士濃度関係徹底図解テキスト&問題集**

T. S

環境計量士は環境都市工学科でとれる資格の中でも重要なものなので、資格をとる時に役立てたいと思い選びました。他の資格勉強本と比較すると、図解が多く、分かりやすいと思います。

**硝子の太陽 R****硝子の太陽 N**

S. K

この本は、誉田哲也さんの最新作で、<ジウ>と<姫川玲子>シリーズのコラボ作品です。私はどちらも読み、おもしろかったのでこの本を選びました。

**元素のすべてがわかる図鑑**

R. H

元素について基礎から科学的なものまで沢山の情報が載っている上に、図鑑らしく写真などを使って、見て面白く、読んでも面白い美しい図鑑です。また、1冊ですべての元素を理解することもできます。

一度手にとって見てください。

**異形再生**

N. I

この本は 19 世紀に「絶滅動物図録」という、伝説の生物の解剖図を記したスペンサー・ブラック博士の物語で、後半にはその解剖図も記載されています。

骨格などが細かく書かれていて、とても見ごたえがあると思います。

**【表紙】海軍の町、呉**

呉が海軍の町であるということを強く感じることでできる「アレイからすこじま」より夜の潜水艦を撮影しました。

(撮影：呉高専建築学科 4年 宮本 皓章)

お知らせ

# 貸出回数上位ベスト10

(調査対象期間:平成28年4月1日～平成28年9月30日)

順位	題名	著者	回数
※ 1	大学編入のための数学問題集	碓氷 久ほか	26
2	編入数学徹底研究:大学編入試験対策	桜井基晴	18
3	TOEICテスト新公式問題集:新形式問題対応編	Educational Testing Service	13
4	「10年度版」:SPIテストセンター問題集「完全版」	中村一樹	11
5	Vol. 6:TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	9
5	羊と鋼の森	宮下奈都	9
7	演習力学-新訂版-	今井功ほか	8
8	1;技術倫理	C, ウィットベック	7
8	技術者倫理入門:地球に生きる技術者になるために	吉村忠与志ほか	7
8	第二種電気工事士完全合格教本:ここが出る!!	ノマド・ワークス	7

# DVD利用回数ランキング

(調査対象期間:平成28年4月1日～平成28年9月30日)

順位	題名	No	回数
※ 1	ゲド戦記	377	3
2	プラダを着た悪魔	376	2
2	西の魔女が死んだ	502	2
3	犬と私の10の約束	461	1
3	チャーリーとチョコレート工場	305	1
3	たけしのコマ大数学科	447	1
3	マンマ・ミーア	511	1
3	ワイルド・スピード	122	1
3	世界の中心で愛をさけぶ	210	1
3	レッドクリフ Part1	510	1

## 編集後記

図書館の書庫に入ったことはありますか? 書庫には約4万冊の本があり、開架の本と同じように、閲覧や貸出ができます。どんどん活用してください。